



日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1 日本音楽教育学会第 45 回大会を終えて	
1-1 大会報告	2
1-2 院生フォーラム報告	3
2 第 7 回夏期ワークショップ「長唄ワークショップ in 千葉」を終えて	
2-1 まねて唄い、まねて奏した「千葉版 娘道成寺」	4
2-2 長唄・三味線・小鼓の体験的な学び.....	4
2-3 平成 26 年度夏期ワークショップ収支決算書.....	5
3 お知らせ	
3-1 学会の動向	6
3-2 平成 27 年度（第 13 回）音楽教育ゼミナールについて.....	7
3-3 編集委員会	7
4 音楽教育の窓	
4-1 〈連載〉音楽・教育・学校（2） —— 3 つのニュースと音楽教育——	8
5 会員の声	
5-1 国際シンポジウムに参加して.....	9
5-2 「身体が音を見つけるまで」を待ってみる —— 研究雑感あるいは道草の言い訳——.....	10
6 新刊紹介	
6-1 『日本の学校吹奏楽を科学する』	11
7 報告	
7-1 平成 26 年度第 3 回常任理事会.....	12
7-2 平成 26 年度第 2 回理事会.....	13
7-3 平成 26 年度総会	15
7-4 平成 26 年度第 2 ・ 3 回編集委員会.....	19
8 事務局より	20
編集後記	

1 日本音楽教育学会第45回大会を終えて

1-1 大会報告

大会実行委員長 今川 恭子

キャンパスが紅葉に染まりはじめる10月25日・26日、日本音楽教育学会第45回大会が聖心女子大学において開催されました。ご参加くださった沢山の方々（正会員375名、臨時会員128名、合計503名）、大会運営にお力添えくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

会員による研究発表、共同企画からは高い研究意欲と熱意が伝わり、活発な意見が交わされる発表会場は熱気に溢れておりました。中には座席の不足する会場もあってご迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。2年続きの企画2本が並ぶプロジェクト研究（常任理事会企画）は、音楽教育研究と実践が今日向き合うべき課題への取り組みとして一層の充実を遂げつつあり、本学会の社会的存在感の高まりに繋がる原動力になっていくであろうと信じます。

大会実行委員会企画のテーマは、「文化の継承と創造」でした。企画趣旨と内容については、決定までの過程で活発かつ刺激的な議論は沢山交わされたものの、実は驚くほどスムーズに決まりました。人は文化の中に生まれ、育つと言われます。文化とは、「これを大事にして次世代に引き継ぎなさい」と上から規定されるものではなく、私たち一人一人が音楽実践（音楽だけには限りませんが）に関わることを通して体現していくものであろう、と考えます。そのあらゆる実践場面（学校だけでなく、地域、家庭、多様なコミュニティ）に「教え」と「学び」はあります。今日の社会におけるそうした実践のリアルな様相を見つめるならば、そこには音楽教育研究と実践に携わる者に突き付けられた重要な課題が見出されるのではないのでしょうか。この課題に対する答えは一朝一夕に出せるものではないでしょうし、「ひとつの正解」はないのかもしれませんが、しかし多種多様な音楽実践に囲まれる今だからこそ、今大会ではこの課題に向き合いたいと思いました。



第1日目の講演とシンポジウム、第2日目のパネルディスカッションは、一見対極にあるものと思われたかもしれませんが、しかし終わってみると、「継承の中の創造、創造の中の継承」をあらためて実感させられるものだったと思われまます。グローバル化の現代における文化的アイデンティティの問題。自分の生きる文脈の中で「受け継がざるをえないもの」を背負いながらグローバルに創造的に実践する姿。いわば異文化に魅了され、それを自分の立ち位置で継承する生き方。テクノロジーの最先端を駆使する姿。テクノロジーは人間の表現を代替して

いくというよりは、それを通して人を見つめ、人と人との新たな結びつきをつくり、人の中あるいは人と人との隔てる障壁を「越える」可能性を示すものでした。私たち誰もが色々なものを受け継ぎ、自分を囲むあらゆる実践と関わりながら生き、選び、参加し、つくり手となっていきます。そうした中で、心から次世代の子どもたちに伝えたいと思うものを体現する者でありたい。そのようなシンプルな思いに至ることができた2日間でした。不十分な点、議論を呼ぶ点は多々あったかもしれませんが、この企画が「文化の継承と創造」に参加する主体としての自分を見つめる契機となり、次なる展開に繋がっていくことを、実行委員一同心より願っております。

最後に、音楽教育研究と実践の一層の発展、活性化を祈りつつ、次年度の宮崎大会にバトンを渡したいと思います。

（写真：右上／聖心女子大学 岡崎淑子学長による講演、左下／実行委員会企画シンポジウム）

1-2 院生フォーラム報告

伊原小百合（東京藝術大学大学院修士課程）

上 蘭 未織（東京藝術大学大学院修士課程）

日本音楽教育学会第45回大会では、大会初日の10月25日（土）に院生フォーラムを開催しました。今回は東京藝術大学、及び聖心女子大学の大学院生が企画・運営をし、ポスター発表と自主企画を行いました。

ポスター発表には22名が参加し、幼児教育や学校教育、歴史研究などの様々な研究テーマが見られました。映像を流したり、画像を添付して発表する方もいたり、ポスターのまとめ方に発表者それぞれの工夫が見られました。期間中には活発な意見交換やコメントシートを通して多くのご指導を賜りました。ご指導下さった先生方、諸先輩にこの場をお借りして御礼申し上げます。ポスターを作成してみることで自身の研究課題が改めて明らかになるとともに、様々なご意見を通して新たな文献や資料に当たるきっかけとなりました。



また、自主企画では「音楽教育研究の手法—フィールドワークを中心に—」をテーマにディスカッションを行いました。院生同士が交流でき、自由に語り合える場を設けたいと考え、ワールドカフェの方式を用いました。参加した19名の院生は4つのグループに分かれ、各テーブルに用意された模造紙に自由に書き込みをしながら、15分間のディスカッションを行います。これを、メンバーを入れ替えて2回行いました。1回目のセッションでは自己紹介と研究概要を話してあっという間に時間が経ってしまいましたが、2回目のセッションでは、メンバーが変わることで話題がひろがり、フィールドワークにおける仮説生成の難しさやフィールドの選び方に関して、また研究の焦点の絞り方についてや、データの分析方法等、各々の研究手法についての考えや悩みを話し合うことができました。記録が残ることで参加者が情報を共有しやすくなり、次の討論に発展できたのは、ワールドカフェならではの利点であったと思います。



ディスカッション終了後も参加者同士の会話が弾み、各々の研究に関する情報交換に繋がったのではないかと思います。参加者からは「新たな発見や視点を得られた」、「人脈が広がった」などの声や、ワールドカフェの手法を今後も様々な場で取り入れたいという意見が出ました。一方、5人が話すには15分では足りなかったという意見もあり、1グループの人数バランスと時間配分に改善の余地があると考えられます。来年以降も発展的に継続されることを期待します。

(写真：

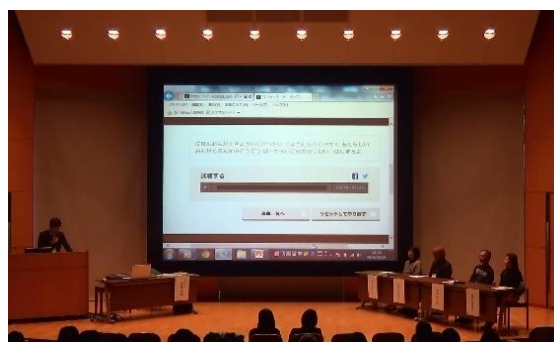
右上／院生フォーラム ポスター発表

左下／院生フォーラム 自主企画

右下／実行委員会企画パネルディスカッション)

大会HPに大会報告を掲載いたしました。
是非ご覧ください。

<https://sites.google.com/site/ongakukyoiku/>



2 第7回夏期ワークショップ「長唄ワークショップ in 千葉」を終えて

2-1 まねて唄い、まねて奏した「千葉版 娘道成寺」

寺田己保子（埼玉学園大学）

8月21日（木）、第7回夏期ワークショップが千葉大学教育学部音楽棟で開催され、会員、非会員合わせて28名の参加者があった。講師として、山田美由紀会員を含む一般社団法人長唄協会会員の10名の先生にお越しいただいた。今回の企画は、参加者が唄と楽器（三味線または小鼓）の両方を体験し、さらに合奏することで長唄の全体像に触れようとするものである。

はじめの挨拶で、山田美由紀講師より長唄の唄い方について、まず「耳で聴いたものを真似る」こと「ことばをしゃべるように唄う」ことが強調された。この日のために準備された「千葉版 娘道成寺」を教材に、全員で唄の講師のあとについて一通り唄った後、唄、三味線、小鼓の3か所に分かれて練習した。小鼓の部屋では、楽器についてのお話から楽器の持ち方、構え方など一人ひとりに目が配られ、小鼓の唱歌、唱歌とエア小鼓による練習など、実際に音を出すまでの練習過程を大切に確実に進められていた。特に乱拍子のかけ声は参加者全員がかなり苦労していたが、間の取り方やかけ声の調子など、講師を手本に必死にまねする姿が見られた。

午後は三味線、囃子各楽器の説明を受けた後、10名の講師陣による「娘道成寺」（抜粋）を鑑賞し、その迫力ある演奏を耳に残しながら、楽器と唄を交代して各部屋で指導を受けた。講師陣の演奏を聴いて全体像がつかめたためか、午後の各部屋の練習が一段と進み、最後は三味線と一緒に合わせてみることも行われた。発表会では、全体が3グループに分かれ、各自が唄と楽器それぞれの役割で発表に参加し、一回は聴く側になるという方法で、合奏のリハーサル及び発表会を行った。唄、三味線、小鼓に講師陣の笛、大鼓、太鼓も入っていただき、演奏会の雰囲気を整えられた。リハーサルでは参加者に少し緊張が見られたものの、本番は各グループともに堂々たる演奏ぶりであり、「千葉版 娘道成寺」が完成した。

最後に、この日一日中ワークショップの様子をご覧になっていた長唄協会杵家弥七先生よりお話を伺うことができた。その中で、「日本の間とは、西洋音楽のテンポでもなければリズムでもなく、人間の息」ということばに、学校教育で日本の伝統的な音楽、ひいては日本の文化を扱っていくうえでの重要な示唆をいただいたと思った。また、2014年3月長唄協会が出された教員向けのテキストについての紹介があり、現場の先生方に活用していただきたいということであった。長唄の唄い方、楽器の持ち方、構え方から実に丁寧に一人一人に教えていただき、参加者にとって大変贅沢な時間を過ごすことができた一日であった。

2-2 長唄・三味線・小鼓の体験的な学び

桐原 礼（帝京大学）

今回のワークショップは、都心から1時間ほど離れた千葉大学での開催であったが、鳥取、仙台、山梨、群馬、新潟など遠方からの参加者もあり、また現場でのベテラン音楽教員の方々が多くみられた。唄、三味線、小鼓の部屋に分かれ、受講者2～3名に1名の講師がつくような贅沢なレッスンを受けながら、初心者であっても課題曲をひととおり演奏することができる内容であった。

三味線については、楽器の構え方や撥の持ち方など、講師がひとりひとりを周りながら丁寧に指導してくださっており、はじめは「本当に一日でできるのだろうか」と心配していた受講者から「初心者でも最後まで弾けた」との喜びの声が上がっていた。小鼓は、一般的には学校に実物がないため、実際に楽器に触れながら学ぶことができる貴重な体験であったようである。良い音の出る打ち方やかけ声の入れ方など、何度も講師に質問しまねようとしていた。また全員が唄を体験し、独特のうたいまわしや音の取りにくい箇所を繰り返し練習していく中、声楽の発声とどのように違うのかと、講師の表情や口まわりを詳しく観察しながら熱心に質問している受講者も

みられた。唄の習得に向けて、多くの受講者は楽譜に書かれた数字譜で音程を確認している様子であり、講師の範唱をまねることに集中できないという、唄を学ぶ際の困難が感じられた。最後の発表会では、3グループにて「千葉版 娘道成寺」が演奏され、「他パートと合わせるのがとても楽しかった」、「子どもの緊張する気持ちがよく分かった」など、ワークショップにおける学びを総括する場となった。

会の締めくくりに、長唄協会杵家弥七先生より、「伝統とは先人が工夫して編み出してきたルール。これらをひとつひとつ着実に守って次世代に伝えることが大事」とのお話があった。これは、学校音楽教育や教員養成にて伝統的な音楽を扱う際、基本姿勢として忘れてはならないことであると感じた。



小鼓のレッスン風景



「千葉版 娘道成寺」発表会

2-3 平成 26 年度夏期ワークショップ収支決算書

◆収 入

項 目	決 算	備 考
会 費	105,000	3,500 円（会員）×14 名, 4,000 円（非会員）×14 名
懇親会費	36,000	4,000 円×9 名
学会からの補助	150,000	
追加補助	34,845	
利 息	6	
合 計	325,851	

◆支 出

項 目	決 算	備 考
講師謝金	100,000	長唄協会に一括
楽器借用料	5,000	小鼓 8, 大鼓 1, 太鼓 1（長唄協会に）
楽器運搬料	20,000	（長唄協会に）
学生アルバイト謝金	19,200	6,400 円（800 円×8 時間）×3 名
弁当代	19,000	弁当 800 円×20 個, お茶 150 円×20 本
ござレンタル	15,752	
その他諸経費	16,452	切手代, 毛氈送料, 銀行振込手数料, 実行委員交通費
懇親会費	70,000	3,500 円×20 名で一括
施設借用料	60,447	施設借用料 58,687 円, 光熱費 1,760 円
合 計	325,851	

上記のとおりご報告致します。

平成 26（2014）年 10 月 24 日
第 7 回夏期ワークショップ実行委員会委員長
本多佐保美

3 お知らせ

3-1 学会の動向

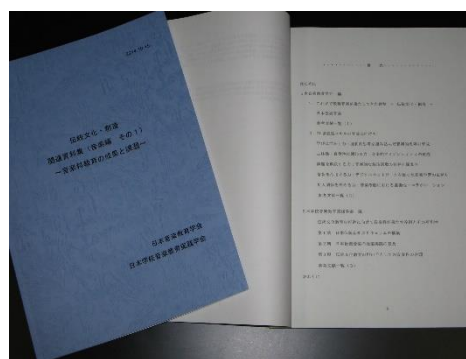
日本音楽教育学会会長 小川 容子

平成 26 年度上半期の取組み

第 21 期体制が始動してから半年が経ちました。会長就任挨拶で掲げた「研究によって生み出される音楽芸術の知の正当性を科学的に示す」とことと「教育・研究に関する学際的な交流を推進しその成果を社会に還元する」ことは、次のような形で成果をあげつつあります。

- ①他学会（日本学校音楽教育実践学会）との連携推進
- ②美術分野（大学美術教育学会・日本美術教育学会・美術科教育学会）との協力体制確立
- ③冊子『伝統文化・創造 関連資料集（音楽編その 1）～音楽科教育の成果と課題～』の発表

「③冊子」は「伝統文化・創造」をキーワードに、会員の皆様がこれまでに発表された成果物（著作・学会誌掲載論文・口頭発表・プロジェクト研究・共同企画等）を一覧表にして研究動向としてまとめました。今後、「その 2」「その 3」・・・として継続発信できればと考えております。上述の三項目はいずれも、「教科音楽」の重要性を客観的に説明するための強力なツールになるでしょうし、学際的な研究の発展に向け、底知れぬ原動力にもなると信じております。会員の皆様のご協力・ご支援をいただき、現在、常任理事・理事一同が一丸となって邁進中です。



『伝統文化・創造 関連資料集（音楽編その 1）』

日韓音楽教育学会の交流と今後の発展

本年 8 月 6 日、ソウルで、韓国音楽教育学会 Kyungsil Hyun 会長, Eunshik Choi 副会長, Yong Hee Kim 副会長と会談をおこないました。別の国際会議（APSCOM：アジア音楽知覚認知学会）の開催期間中であり、会談時間も 4 時間と限られたものではありませんでしたが、大変和やかで充実した会談となりました。Hyun 会長はその昔、ご主人と共に日本に短期間留学・滞在されたことがあり、Choi 副会長も Kim 副会長も日本びいきの親日家ということで、英語・韓国語・日本語が混ざり合った国際色豊かな会話となりました。

会談の席上では、①国際セミナーやお互いの年次大会で、両国会員の有意義な研究交流を進めること、②過剰な接待は双方の負担になるのでやめること、③来年度の年次大会（第 46 回大会、宮崎大会）に Hyun 会長を招聘し、講演をしていただくこと、④来年度、両国にとって都合の良い時期に国際セミナー（英語発表を主とした研究交流）を開催すること等の合意が得られました。

特に「国際セミナー」については、完成した研究を発表するよりも、未完成でも構わない、アイデア萌芽の段階でもいいのではないかと、ポスター発表も面白い、共通するトピックについて意見交換会や討論会をおこない、数年後に共同研究へと発展させたい、といった夢のある話で盛り上がりしました。学会発表の場というのは、さまざまな意見や考え方がぶつかりあう場であり、熱い討論や交流が契機となって、新たな面白い「何か」が生まれる場でもあると思います。対話型セッション、体験型セッション、WEB 同時発信フォーラムなども企画できればと考えております。韓国音楽教育学会との交流を通して、日韓両国の面白い研究たちがアジア発として発信できるよう、そして何より、会員の皆様に「参加して良かった」と言ってもらえるよう、ただ今、鋭意検討中です。

3-2 平成 27 年度（第 13 回）音楽教育ゼミナールについて

常任理事 佐野 靖
常任理事 水戸 博道

平成 27 年度に予定されている第 13 回音楽教育ゼミナールは、下記の要領で開催されることが決まりましたのでお知らせいたします。

テーマ：実践研究をどう論文にまとめるか
開催日：2015 年 8 月 29 日（土）・30 日（日）
会 場：明治学院大学白金校舎アートホール

第 12 回音楽教育ゼミナール（立教ゼミナール）は、「英語」と「授業研究」の 2 本立てのプログラムで開催されましたが、第 13 回は、第 11 回の神田ゼミナールから継続されている実践研究における研究方法の追究にこだわることにします。第 12 回の「最先端の授業研究を学ぼう！」では、外部講師のレクチャー、ディスカッションやグループワークを取り入れた音楽科授業研究の実践を通して、専門や立場、世代などをこえた学び合いを経験することができました。

いうまでもなく、授業研究をはじめとするさまざまな実践研究においてどのように理論を生成、構築していくかという問題は、簡単に一定の結論を導き出せるものではありません。むしろやればやるほど、新たな課題が現れてきます。それほど実践研究には奥行きがあるともいえるのではないのでしょうか。ましてや音楽教育の実践は、生の音・音楽を介した創造的な営みであり、常にさまざまなかわりやコミュニケーションを言語化する難しさが伴います。

「実践研究をどう論文にまとめるか」というテーマは、実践研究の難しさ、奥行き、あるいはその面白さを分かち合い、これまで自明とされてきた前提などを問い直してみたいという思いから設定しました。若手には若手の、ベテランにはベテランの悩みや課題があります。ゼミナールという場で、みんなで一緒に悩み、考え、議論を深めたいと思います。

なお、内容の詳細につきましては、ゼミナール実行委員会で検討し、随時学会ホームページやニュースレターを通して皆様にお知らせいたします。また、今年度中にはゼミナールのホームページを立ち上げ、ゼミナールに関する情報を発信していくことにいたします。

3-3 編集委員会

編集委員会委員長 永岡 都

『音楽教育学』第 44 巻第 2 号の発行に際し、今年は大会終了から入稿までの期間が非常に短く、関係諸氏の皆様に大変ご負担をおかけしましたが、快くご協力いただき、ありがとうございました。また、『音楽教育実践ジャーナル』vol. 12 no. 2：特集「授業をクリエイトする—音楽の本質をめざして—」（2015 年 3 月発行予定）にも多数ご投稿いただき、ありがとうございました。

編集委員会では、音楽教育あるいは音楽科教育をめぐる今日のさまざまな状況を視野に入れ、今後も意欲的なテーマに取り組んでいきたいと考えております。次号の『音楽教育実践ジャーナル』vol. 13 no. 1 の特集テーマは、「これまでに音楽科が果たしてきた役割、これからの音楽科が担うべき役割」です。そして、次々号の『音楽教育実践ジャーナル』vol. 13 no. 2 の特集テーマも「学習者の視点から学校音楽教育を考える」に決定しました。投稿締切は、vol. 13 no. 1 が 2015 年 2 月 15 日（日）、vol. 13 no. 2 が 2015 年 8 月 15 日（土）です。会員の皆様に時間の余裕をもってご準備いただけるように、従来より特集テーマの告知を早めました。学会誌の活性化に向けて、引き続き皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。

4 音楽教育の窓

4-1 〈連載〉音楽・教育・学校（2）

——3つのニュースと音楽教育——

大熊 信彦（群馬県総合教育センター）

私の住む群馬県は、今年、3つのニュースに沸きました。富岡製糸場と絹産業遺産群の世界文化遺産登録、2015年NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の制作決定、ゆるキャラグランプリ「ぐんまちゃん」受賞です。ローカルな話と失笑を買うことを覚悟で少しずつ書きます。

なぜ製糸場が世界遺産なのか、それは、明治政府の官営工場が創業当初の姿で現存するからだけではありません。高品質な生糸生産の技術革新と積極的な国際交流によって、日本の近代化・国際化はもとより、特権階級のものだった絹を世界中の人々に広め、世界の絹産業を発展させ、生活や文化を更に豊かなものにしたからです。

「花燃ゆ」の主人公、文（ふみ）の夫、楫取素彦は、元・長州藩士で吉田松陰の親友でした。初代の群馬県令（現在の知事）となり、文化や背景の違う複数藩の集合体で「難治の県」と言われた地で県政を推進しました。その鍵となったのが、産業振興と教育の充実でした。幼稚園、小学校、師範学校などをつくり、県民を説得して義務教育就学率を全国トップレベルに押し上げ、また、編纂した道徳の教材は全国の学校で使われました。

ポニーをモチーフにした「ぐんまちゃん」は、商業的なブームに乗った急ごしらえではありません。1994年開催の「全国知的障害者スポーツ大会」のマスコットとして県職員のデザインで誕生し、それ以来20年間にわたり文化イベントなどで地道に活動して、県民に広く親しまれ愛され続けてきました。

さて、東京国立博物館館長の銭谷真美氏は「人は、ある日、突然、ゼロから生まれてくるのではなく、歴史の中の存在として、また地理的には、この日本に生まれてきました。歴史を背負い、地理的な条件の中で個々人が生かされ、生きていく存在なのです。そして、自分たちのいろいろな文化や価値あるものを未来につなげていく、という役割を担っています。グローバル化社会が進展する中、どこの国に生まれても誰もが幸せになれるようにしていかなければなりません。これからの教育にはこうした視点が求められます」と述べています（「提言」『中等教育資料』文部科学省、2013年1月）。前述の3つのニュースは決して「今のできごと」という「点」ではなくて、多くの人の創意工夫、試行錯誤、熱意や努力が、過去から今に、そして未来へと流れる時間軸の「線」でつながっていると思います。

今、求められる教育の主要課題、それは、子ども自らが歴史的・地理的な存在であることを意識しつつ、異なるものに対しても理解・尊重しながら人間関係を形成し、積極的に社会に参画して、持続可能な未来への責任を自分なりに果たすことのできる能力や態度の育成です。学校教育にはこの具現化が期待されています。したがって、教育課程の編成・実施の観点からは、そこに貢献できる教科の学習が一層重視されるでしょう。

今年11月、東京で全日本音楽教育研究会全国大会（小・中学校部会大会）が行われました。中学校の授業の一つにブルガリア、グルジア、南アフリカそれぞれの音楽の特徴を捉えて聴く鑑賞領域の学習が公開されました。文部科学省の臼井学教科調査官は全体講評の中で「音楽文化の多様性を理解するために、単に教材の量を増やせばよい、ということではありません。生徒が自らの音楽観を再構築していく学習でこそ、そのねらいが実現されます。思考することは決してゴールではなく、考えることによって音楽そのものの聴き味わいが深まっていく授業でした」とこの実践を意義付けていました。

音楽が醸し出す質感は、個々人の感性と直接的に対峙します。音楽教育においても、純粋に音や音楽の美に迫り、言葉による表現を遙かに超えた感動や陶酔など、音楽そのもののもつ価値を大事にすべきです。一方で、世界の多種多様な音楽が、それを生み出した人や社会の有り様と密接に関わって存在していることへの思考・理解を深めることは、21世紀を生きる人に求められる重要な資質・能力の育成につながっていきます。

音楽教育に〈固有の力の育成〉はなにか、そして、音楽教育の目標の更に基底にある〈汎用性のある力の育成〉はなにかについて、それぞれを明らかにした上で、二項対立で捉えるのではなく、両者の交わるところに音楽教育の存在意義を見いだすための研究が益々重要となるでしょう。その際、音楽教育が学校教育全体を、更には社会全体を発展させるものであることを常に意識して、誠実に実践と検証を積み重ねていきたいと思います。

5 会員の声

5-1 国際シンポジウムに参加して

熊谷 敬太（弘前大学大学院修士課程）

第7回弘前大学国際シンポジウムが、10月18日（土）、19日（日）の二日間、弘前大学50周年記念会館みちのくホールで開催されました。このシンポジウムでは“Proposing a New Music Education View through Non-European Sound Practice”をテーマに、ニュージーランド、香港、カナダ、フィンランドから招聘された研究者、弘前大学及び附属特別支援学校の教員、大学院生が音楽教育の現在と未来について、集中的な討議を行いました。

私はOf the “Gap” in the Music という題目で研究発表させて頂きました。文章構成、発音共に拙い英語にも関わらず、数多くのご指摘を頂けたことは私の今後の研究にとって貴重な経験となりました。しかし、初めての英語での発表を通して、私は自身の語彙力の無さに愕然としました。また単に私の英語力の欠如ということだけではなく、いかに日本語を慣習的に使っているかも痛感しました。つまり、日本語の個人的な使い易さ故に、雰囲気で言葉を選んでしまっていたように感じたのです。そのために、いざ英語に翻訳しようとすると言いたいことが複雑すぎて、自分で英訳することができない、ということがしばしば起こりました。研究は個人の日記やブログではなく、社会に発信するものなので、これを深く反省し、英語力をしっかり身につけると共に、言葉をもっと慎重に選ぶことの必要性を再認識しました。

一方で、シンポジウムを通してよく耳にした diversity（＝多様性）という語に一種の危機感を覚えました。西洋音楽だけが偉大なのではなく、世界にはさまざまな文化や音楽がある、音楽は単一の価値観のみではかることができない、というのは今や当たり前なので、diversity という語の意図するところがわからないわけではありません。しかし同時に、この語で音楽を形容するのは危険であるように思われます。音楽を多様性という語で括って、あれも音楽、これも音楽としてしまえば、音楽と音楽でないものの境界は曖昧になり、いつか音楽は無くなってしまうように思われたのです。これを防ぐために、音楽をどう捉えるか、どう聴くか、あるいは何が音楽か、を思考することが大切だと思います。このように、音楽についてより包括的な道標を示すことができるのが音楽教育研究である、と痛感しました。

英語力、そして音楽教育の重要性に気づくことのできた10月は私にとって貴重な時間でした。学会に参加しているとはいえ、まだ私は何ができるわけでもない未熟者ですが、今後、音楽教育の恩恵を受けつつ、同時に音楽教育に貢献していきたいと強く感じる貴重な経験でした。

※国際シンポジウム詳細については以下をご参照ください。

<http://huis2014.com/>



（写真：Anita Prest氏（University of British Columbia）による発表）

5-2 「身体が音を見つけるまで」を待ってみる

——研究雑感あるいは道草の言い訳——

丸山 慎（駒沢女子大学・ヤマハ音楽振興会）

『忙裡閑を偷む』—先日、本務校の学園祭で同僚の先生方とやや変則的なピアノ・トリオを組んで演奏する機会があった。担当はヴァイオリンである。学生時代、教科書は忘れても楽器だけはしっかりと持ち歩いていたような私なのに、人前での演奏からは久しく遠ざかっていたこともあり、出来のほうは散々だった…。のはずだが、ちょっと面白い発見もあって実は喜んでいる。すっかり鈍った身体に必死に鞭を入れていた最中、自分でフィンガリングをあれこれと思案する前に、それこそ“手指が自ずと”動いてくれた瞬間があったのだ。手指の方で勝手に決めてくれたフィンガリングは、不思議なことに最後までずっと“いい感じ”のままであり、かえって自分であれこれ試した箇所の方が残念…という具合であった。

学会ニュースレターの紙面に、たわいもない楽器遊びのひとコマを引き合い出すのもどうかとは思いつつ、「手指が勝手に決めてくれたこと」は、自身の研究テーマにも通じる格好のデモンストレーションであるということで、どうかご容赦願いたい。私は、音楽家の巧みな身体技法やリトミックなどの実践に対する興味から、「身体性」と音楽表現との関係について考えるという作業を続けている。管弦楽の指揮者を相手に運動解析をしてみたり、プロの演奏家たちに向かって「この身体の動きと表現との関係は？」と臆面もなく尋ねてみたり、とにかく「音が生まれる具体的な契機としての身体」を記述しようと日々もがいてきた。方法は手探りで、お世辞にもスマートとはいえないものばかりである。

最近ではもっぱら、「赤ちゃんの動き」に魅せられている。小さな楽器を使って赤ちゃんが母親が遊んでいる場面を記録した映像を観ていると、「何でこれが音楽の研究になるの？」というくらいに普通で、無論、すごい発見などがあるわけではない。可愛らしい小さな手や口、ときには足を使って、赤ちゃんが不器用にモノと戯れる様子が映し出されているだけである。ところが、数年分にも及ぶデータを眺めていると、やがて彼らはそれらのモノを「音を出す道具」として扱うようになっていく（もちろん全く洗練などされてはいないが）。母親が傍らで示す見本を従順に受け入れたふうでもなく、楽器についての知識をどこかで仕入れたわけでもなさそうだ。それはいわば赤ちゃんの身体が、何のスキルも知識もないままにモノと出会い、探索し、そこに内在する“音の出る可能性”を発見する、といった趣なのだ。そんな様子を見ていると、赤ちゃんの行動の意味を急いで解釈したり、もっと効率よく音が出せるように教授したり、といったことが、何だかひどく大人の都合であるようにも思われてきた。私の手指が自ずと動いてくれたように、赤ちゃんの手や足も少しずつモノに潜む可能性に触れていった。何にも媒介されない、きわめて純度の高い「音との出会い」がそこに実現されていたような気がしたのである。

「身体が音を見つけるまで」を待ってみる—そんな道草スタイルの研究があってもいいんじゃないかなと思いつつ、それが鈍重なペースでしか進まない自分の仕事の“体のいい言い訳”にはならないように、とも思っている。



（写真：学園祭で披露したピアノ・トリオ（左端が筆者））

6 新刊紹介

6-1 『日本の学校吹奏楽を科学する』

新山王政和（愛知教育大学）



私たちが大切にしたいと考えている学校吹奏楽、私たち自身を育ててくれた学校吹奏楽で頑張っている生徒を、音楽を通じてメッセージを伝えようとする「音の伝道師」に育てて欲しいと願っています。そして生徒が学校吹奏楽の活動を通じて多くの音楽と出会い、様々なことを経験し、音楽と深く向き合うことで、自ら音楽の道を拓くことのできる場であることを願いつつ、本書を編集しました。

前半では、この学校吹奏楽が担っている教育的機能と社会的貢献について冷静に省みる自己点検・自己評価を行っています。

後半では、音や音楽に対する人間行動の面から、学校吹奏楽の指導者へ向けた提案をまとめています。我々は、一つの音楽的現象について実際にはそこで何が起きているのか、練習することによってどう変化するのか、なぜそのような現象が起きるのか、その実態や事実を知らないまま指導したり練習させたりすることがあります。そこで、一

見単純に捉えがちな音楽的な現象に焦点を合わせて、できるだけ指導上のヒントや根拠になり得るよう、現実的対応可能な見地から整理しています。

本書の主な内容は次のとおりです。

- ①学校吹奏楽の活動における生徒の音楽能力の発達過程に関する話題
 - ②学校吹奏楽の活動における外部指導者システムの事例紹介に関する話題
 - ③フット・タッピングの生起現象とその正確さ、音楽能力やテンポ・マッチングに関する話題
 - ④マーチング・ステップの着地タイミングとビート音、動作タイミングや動作速度に関する話題
 - ⑤指揮基本動作の動作タイミングに関する話題
 - ⑥異なる提示音に対するピッチ知覚の相違、声や管楽器によるピッチ・マッチングに関する話題
 - ⑦パフォーマンスにおける「かたまり（時間的な区切り方、間）」の規則性と確立プロセスに関する話題
- *コラム「どんなバンドでも必ずやってる常識です！指揮者のお仕事」、「どんなバンドでも必ずやってる常識です！演奏者のお仕事」、「吹奏楽・マーチング指導で使える言葉 40」、「音楽は点で始まるのか、点で終わるのか～“はねる”文化と“とめ”の文化～」

初版 2013 年 12 月，第 2 刷 2014 年 11 月

スタイルノート

本体 2000 円＋税

ISBN978-4-7998-0122-2

～ 広報委員会からのお知らせ ～

新刊・近刊図書の紹介やイベント，研究会等の報告など，皆様からの投稿をお待ちしております。投稿先アドレスは下記の通りです。

onkyouiku.kouhou@gmail.com

7 報告

7-1 平成 26 年度第 3 回常任理事会

日 時：平成 26 年 10 月 24 日（金）14：00～15：00

場 所：聖心女子大学 マリアンホール 会議室 グリーンパーラー

出席者：小川，伊野，本多，加藤，北山，権藤，佐野，嶋田，杉江（記録），水戸，三村

理事会と議題が重なるため，小川会長の挨拶のあと，報告事項を割愛し審議事項に入った。

【審議事項】

1. 総会議題の確認（本多）

理事会にて確認することとなり，省略。

2. 第 46 回大会について（小川）

平成 27 年 10 月 3 日（土），4 日（日）に宮崎（於 シーガイアコンベンションセンター）で開催予定であり，準備が着々と進められていること，この宮崎大会に韓国教育学会会長を招待講演者として依頼する予定であることが報告された。

3. 第 47 回大会候補地について（小川）

関東地区の開催が提案された。

4. 来年度ゼミナールについて（佐野）

明治学院大学（東京）を会場に，授業研究に焦点を絞り「実践研究をどう論文にまとめるか」（仮）をテーマとして，8 月後半に開催予定であることが報告された。

5. 会長諮問プロジェクトについて（加藤・小川）

加藤常任理事から配付資料に基づいてプロジェクトの趣旨が説明された。教科音楽の重要性を明らかにし，その必要性を学会から社会にどう発信していくか，学会と社会をどうつないでいくかについて，他学会との連携，会員対象に「社会への発信」に関するアンケートを実施し，会員のアイデア・情報・蓄積を収集していくことなどを理事会に提案する旨，報告があった。その後，「会長諮問プロジェクト」の立ち上げについて小川会長より提案があり，メンバーについては，「何を行うか，何ができるか」を検討する企画立案のためのメンバーをまず委嘱し，そこで立案された企画のもとに，活動を動かしていくチームを編成し，できるだけ多くの会員の参画を求めていく必要があることが確認された。その他，50 周年事業とリンクさせること，数の力は大きいので，全日音研（全日本音楽教育研究会）とも連携する必要があるのではないか，イギリスにおける“Music Manifesto”のようなものをつくる必要があるのではないか，という意見が出された。

6. 「学会誌のあり方に関する検討委員会」（仮称）について（小川）

『音楽教育実践ジャーナル』検討委員会からの答申を受けたところであるが，査読制度，編集委員会の役割，投稿論文掲載数の少なさ等の問題は，『音楽教育実践ジャーナル』と『音楽教育学』両方に関わる問題であるので，改めて「学会誌のあり方に関する検討委員会」（仮称）を立ち上げることが，小川会長より提案された。新たな検討委員会を立ち上げるに際しては，過去の査読に対する異論から出発するのではなく，現在のあり方の本質的な課題について議論し，今後の学会誌の望ましいあり方を展望するためであるということを確認した上で，理事会に提案されることとなった。

*第 4 回常任理事会

平成 27 年 2 月 22 日（日）14:00～16:30（予定） 於 立教大学

7-2 平成 26 年度第 2 回理事会報告

日 時：平成 26 年 10 月 24 日（金）15：00～17：00

場 所：聖心女子大学 マリアンホール 1 階 会議室 グリーンパーラー

出席者：小川，伊野，本多，小畑，加藤，北山，木村，権藤，佐野，嶋田，杉江，中嶋（記録），
尾藤，福井，松本，水戸，三村，村尾，安田

小川会長の挨拶に続き，本多事務局長から平成 26 年 7 月 27 日以降の会務報告があった。

【会務報告】

〈平成 26 年 7 月 27 日以降〉

7 月 27 日 平成 26 年度第 2 回常任理事会（於 立教大学）

8 月 8 日 平成 26 年度第 3 回編集委員会（於 立教大学）

8 月 21 日 第 7 回ワークショップ「長唄ワークショップ in 千葉」会場：千葉大学

8 月 29 日 『音楽教育実践ジャーナル』vol. 12 no. 1，ニュースレター第 57 号発送
第 45 回大会プログラム発送

【審議事項】

1. 総会議題の確認（本多）

資料に基づいて「平成 26 年度日本音楽教育学会総会」の議題について説明があり，承認された。

2. 平成 26 年度補正予算案及び平成 27 年度予算案について（杉江）

平成 26 年度補正予算案及び平成 27 年度予算案について説明があり，承認された。（※ML にて提案，承認）

3. 第 46 回大会について（小川）

平成 27 年 10 月 3 日，4 日に宮崎（於 シーガイアコンベンションセンター）で開催することが承認された。

4. 第 47 回大会候補地について（小川）

関東地区の開催が提案され，承認された。

5. 来年度ゼミナールについて（佐野）

授業研究に焦点を絞り「実践研究をどう論文にまとめるか」（仮）をテーマに明治学院大学（東京）での開催が提案され，承認された。

6. 会長諮問プロジェクトについて（加藤・小川）

加藤常任理事から配布資料に基づいてプロジェクトの趣旨が説明され，教科音楽の必要性を社会にどうアピールしていくかについて活発な議論が交わされた。その中で，これまでの研究成果の検証，他学会との連携による研究促進，科学的根拠に基づくデータの必要性，21 世紀型の能力・スキルへの対応など，様々な観点から本プロジェクトの意義と課題を確認した。その後，小川会長から「会長諮問プロジェクト」のメンバーについて，常任理事・理事から選出し，ML にて提案したいとの要望が出され，承認された。

※ML にて小川会長から伊野，小川，加藤，北山，佐野，嶋田，本多，水戸の 8 名のメンバーが提案され，承認された。

7. 「学会誌のあり方に関する検討委員会」について（小川）

今年度 5 月 1 日に「『音楽教育実践ジャーナル』検討委員会」を立ち上げた経緯，検討結果を振り返った上で，改めて次の 3 点の課題が示された。

- ①『音楽教育実践ジャーナル』だけを検討の対象としたが、『音楽教育実践ジャーナル』と『音楽教育学』両方に関わる問題として再検討する。
- ②学会誌投稿の掲載率が低い現状を改善する。
- ③学会誌のあり方を将来的な展望を持って検討する。

これに引き続いて、若手研究者が置かれている現況、査読の方法、査読者の条件、編集委員会の実情と構造的な問題、情報開示、ダウングレードの問題、2つの学会誌の位置づけなど、様々な観点から指摘や改善に向けての案が出された。

その後、小川会長から「学会誌のあり方に関する検討委員会」発足の提案があり承認された。委員会メンバーについては、小川会長からMLにて提案、審議されることが了承された。

※MLにて小川会長から有本真紀、伊野義博、今川恭子、権藤敦子、永岡都、藤井浩基、本多佐保美、村尾忠廣の8名が提案され、承認された。

8. 新入会員及び退会者について（本多）

資料に基づいて説明があり、新入会員 15 名、退会者 7 名について承認された。

正会員 新入会員（平成 26 年 7 月 27 日常任理事会以降）：15 名

【10 月 20 日現在 正会員数 1,535 名 学生会員数 0 名 特別会員数 1 名】

【報告事項】

1. 教科音楽の果たしてきた役割とこれからの課題について（小川）

標記の件について、日本学校音楽教育実践学会と本学会との共同により『伝統文化・創造 関連資料集（音楽編その1）～音楽科教育の成果と課題～』が作成されたこと、文科省教科調査官と会談（10 月 15 日）したことなど、進捗状況が報告された。今後も他学会と連携して本課題に継続的に取り組んでいくことが確認された。

2. 韓国音楽教育学会との交流について（小川）

8 月に訪韓し、韓国音楽教育学会の Kyungsil Hyun 会長、Eunshik Choi 副会長、Yong Hee Kim 副会長と懇談したこと、本学会大会やセミナー開催において、これまで以上に研究交流を促進させていくこと等について合意した旨報告があった。

3. 各委員会報告

(1) 編集委員会（三村・中嶋）

第 2 回と第 3 回の編集委員会における投稿原稿採否の審議結果について報告があった。

▶19 頁に掲載

(2) 国際交流委員会（水戸）

国際関係のゼミナールを来年度の開催に向けて計画中であることが報告された。

(3) 広報委員会（権藤）

ニューズレター第 56 号（6 月）と第 57 号（8 月）が発行されたこと、第 57 号から「会員の声」のコーナーが地区輪番制により執筆されていること、特集「音楽・教育・学校」の連載が始まったことが報告された。

(4) 音楽文献目録委員会（木間→本多）

本多事務局長より、7 月 22 日に委員会が武蔵野音楽大学で開催され、委員長が樋口隆一氏から伊東辰彦氏に交代したことが報告された。

4. 第 7 回夏期ワークショップ報告（本多）

第 7 回ワークショップ「長唄ワークショップ in 千葉」が 8 月 21 日に千葉大学で開催され、28 名の参加があったことが報告された。また資料に基づいて同ワークショップの決算報告があり、追加補助 34,845 円の説明がなされた。

5. 地区メーリングリスト作成について（本多）

地区メーリングリストの作成を検討しているが、メールアドレス登録状況を調べたところ、登録していない会員が各地区2～3割程度いるので現段階では実現できないこと、今後予定されている会員名簿作成の過程で、メールアドレス情報も整備されるので、まずは名簿作成を優先する旨報告があった。

6. プロジェクト研究の予算支出について（伊野）

大会運営費の「プロジェクト研究」割り当ての20万円の使途について、従来はシンポジスト等の謝金为主であったが、調査研究等の経費として積極的に活用されることが要望された。

7. 地区例会報告

各地区担当理事より平成26年度地区例会について報告がなされた（予定を含む）。

- | | |
|------------|--|
| 北海道（尾藤） | : 8月2日（土）開催 於 北海道教育大学旭川校 参加者14名、
研究発表6件 |
| 東北（小畑） | : 日時未定 於 弘前大学 |
| 北陸（伊野） | : 2月～3月に開催予定 於 金沢大学
平成27年度は、日本音響学会音楽音響研究会との共催で開催予定 |
| 関東（木村） | : 日時・場所未定 |
| 東海（新山王→北山） | : 日時・場所未定 |
| 近畿（村尾） | : 5月24日（土）於 立命館大学衣笠キャンパス
参加者21名、卒業・修士・博士論文の発表4件、
地区会員による研究発表2件 |
| 中国・四国（三村） | : 3月に開催予定 場所未定 |
| 九州（福井） | : 3月に福岡で開催予定
平成27年度の宮崎大会の第1回準備会議を12月に開催予定 |

*次回理事会 平成27年5月上旬の予定。場所未定。

7-3 平成26年度総会

日 時：平成26年10月25日（土）17:30～18:30

場 所：聖心女子大学 宮代ホール

開会に先立ち、本多事務局長より、出席者60名、委任状355通、合計415名であることが報告された。会則第13条にもとづき、会員総数の5分の1の定足数（307名）を満たしていることにより、総会の成立が確認された。

1. 開会の辞 伊野義博副会長

2. 挨拶 小川容子会長

3. 議長選出 森下修次会員（新潟大学）が選出された。

4. 報告事項

(1) 会務報告（本多佐保美事務局長）

総会資料に基づいて、平成25年10月13日～平成26年10月25日までの会務報告があった。

(2) 『音楽教育学』投稿規定の一部改正について（永岡都編集委員長）

総会資料に基づいて、投稿規定の改正について説明があった。新規定は平成26年10月25日より実施される。

(新)	(旧)
Ⅳ 原稿の送付 3. (中略) <u>ウ</u> 執筆者姓名 (ふりがな, ローマ字も付けること) <u>エ</u> 所属 <u>オ</u> 現住所または連絡先の住所 (以下略) 5. (中略) かならずしも, <u>英文題目</u> , 英文要旨, 英語のキーワードを必要としない。(中略) <u>エ</u> 英文題目	Ⅳ 原稿の送付 3. (中略) <u>ウ</u> 欧文題目 (研究論文・研究報告のみ) <u>エ</u> 執筆者姓名 (ふりがな, ローマ字も付けること) <u>オ</u> 所属 <u>カ</u> 現住所または連絡先の住所 (以下略) 5. (中略) かならずしも, 英文要旨, 英語のキーワードを必要としない。(中略) <u>エ</u> 英文タイトル

(3) 各委員会等から

- ・編集委員会 (永岡都委員長)
学会誌2誌の締切に関して, 従来よりも1か月早くなる (3月15日→2月15日) ことの報告があった。ジャーナルの特集テーマが発表された。vol.13 no.1「これまでに音楽科が果たしてきた役割, これからの音楽科が担うべき役割」(2月15日締切), vol.13 no.2「学習者の視点から音楽教育を考える」(8月15日締切)。
- ・広報委員会 (権藤敦子委員長)
ニュースレター56号, 57号発行の報告および新刊紹介等の会員からの投稿募集が伝えられた。
- ・国際交流委員会 (水戸博道委員長)
来年度の宮崎大会に, 韓国の音楽教育学会会長を招聘し講演を予定している。「英語で発表する」ゼミナールをグレードアップして, 来年度は少人数の国際会議形式でおこなう。韓国との交流の視点から, 開催時期を検討中であることが報告された。
- ・音楽文献目録委員会 (木間英子委員)
委員長が樋口隆一氏から伊東辰彦氏 (日本音楽学会) に交代したこと, 音楽文献目録第41号が10月1日に発行されたこと, 第42号から価格表示が内税から外税へ変更されていること, Web上での目録閲覧を来年度から試験運用する予定であることが報告された。

(4) 日本音楽教育学会第7回ワークショップ報告 (桐原礼ワークショップ実行委員)

「長唄ワークショップ in 千葉」の報告があった。8月21日に千葉大学教育学部で開催, 参加者は28名。参加者が予想より少なかったこと及び会場費負担等によって, 当初予算より支出が上回った。34,845円を本部から追加補助とした (理事会承認済み)。ワークショップの収支決算書は5頁に掲載。

(5) 来年度ゼミナールについて (佐野靖常任理事)

明治学院大学において, 「実践研究をどう論文にまとめるか」(仮) というテーマで8月に開催予定であることが報告された。

(6) 会長諮問プロジェクトについて (加藤富美子常任理事)

教科音楽の必要性を社会にどうアピールしていくか, 日本音楽教育学会がこれまで行ってきた成果をまとめ発信していくこと, 他学会との連携, 音楽科の存在意義について科学的根拠をもって示していくこと等が必要であり, そのためにプロジェクトを計画・推進していくことが報告された。

(7) 名簿作成について（本多佐保美事務局長）

総会資料に基づいて、説明があった。12 月末に送付される個人票を確認・修正のうえ、平成 27 年 1 月末までに事務局に返送してほしい。来年度、宮崎大会をめどに発行予定であることが報告された。

5. 審議事項

(1) 平成 25 年度会計報告（島崎篤子前常任理事）・監査報告（杉江淑子前会計監事）

大会プログラム掲載資料に基づき、平成 25 年度一般会計、その他会計について会計報告が行われた。監査の結果、間違いのないことが報告され、承認された。

(2) 平成 26 年度事業計画（本多佐保美事務局長）および補正予算（杉江淑子常任理事）

総会資料に基づき、平成 26 年度事業計画の日付が確定したことが報告され、承認された。大会プログラム掲載資料に基づき補正予算についての説明があり、承認された。

平成 26 年度事業計画修正案（下線部分修正）

平成 26 年	
4 月 <u>20 日</u>	平成 25 年度会計監査会
5 月 <u>11 日</u>	平成 26 年度第 1 回常任理事・理事会 平成 26 年度第 1 回編集委員会
6 月 <u>22 日</u>	第 45 回大会研究発表・共同企画申込み締切
6 月 <u>30 日</u>	『音楽教育学』 第 44 巻第 1 号、ニュースレター 第 56 号 発行
7 月上旬	第 45 回大会研究発表受理通知
7 月 <u>27 日</u>	平成 26 年度第 2 回常任理事会
8 月 <u>8 日</u>	平成 26 年度第 2 回編集委員会
8 月 <u>21 日</u>	日本音楽教育学会第 7 回夏期ワークショップ
8 月 <u>29 日</u>	『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 12 no. 1, ニュースレター 第 57 号 発行
	第 45 回大会プログラム発送
10 月 <u>24 日</u>	平成 26 年度第 3 回編集委員会, 平成 26 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会
10 月 <u>25, 26 日</u>	第 45 回大会・総会 会場：聖心女子大学
12 月下旬	『音楽教育学』 第 44 巻第 2 号, ニュースレター 第 58 号 発行
平成 27 年	
2 月中旬	平成 26 年度第 4 回編集委員会 平成 26 年度第 4 回常任理事会
3 月末日	『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 12 no. 2, ニュースレター第 59 号 発行
	平成 26 年度会計決算

(3) 平成 27 年度事業計画（本多佐保美事務局長）

総会資料に基づいて説明があり、承認された。

平成 27 年度事業計画

平成 27 年

4 月中旬～下旬	平成 26 年度会計監査会
5 月初旬	平成 27 年度第 1 回常任理事・理事会 平成 27 年度第 1 回編集委員会
6 月中旬	第 46 回大会研究発表・共同企画申込み締切
6 月下旬	『音楽教育学』 第 45 巻第 1 号, ニュースレター 第 60 号 発行 第 22 期日本音楽教育学会会長・理事選挙
7 月上旬	第 46 回大会研究発表受理通知
7 月中旬	平成 27 年度第 2 回常任理事会
8 月上旬	平成 27 年度第 2 回編集委員会
8 月	日本音楽教育学会 第 13 回音楽教育ゼミナール
8 月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』 vol.13 no. 1, ニュースレター 第 61 号発行 第 46 回大会プログラム発送
10 月 2 日	平成 27 年度第 3 回編集委員会 平成 27 年度第 3 回常任理事会・第 2 回理事会
10 月 3, 4 日	第 46 回大会・総会 会場: シーガイアコンベンションセンター (宮崎)
12 月下旬	『音楽教育学』 第 45 巻第 2 号, ニュースレター第 62 号, 会員名簿 発行発送

平成 28 年

2 月中旬	平成 27 年度第 4 回編集委員会 平成 27 年度第 4 回常任理事会
3 月末日	『音楽教育実践ジャーナル』 vol.13 no. 2, ニュースレター第 63 号 発行 平成 27 年度会計決算

(4) 平成 27 年度予算 (杉江淑子常任理事)

大会プログラム掲載資料に基づいて説明があり, 承認された。

(5) 会則の一部改正について (北山敦康常任理事)

総会資料に基づいて説明があり, 承認された。

日本音楽教育学会会則の一部改正

修正案	現 行
第一章 総則 第 2 条 本会は, 音楽教育に関する会員相互の研究協議をとおして, 音楽教育研究の振興と音楽教育活動の発展に貢献することを目的とする。	第一章 総則 第 2 条 <u>本会の目的は次のとおりである。</u> (1) 本学会は, 音楽教育に関する会員相互の研究協議をとおして, 音楽教育研究の振興と音楽教育活動の発展に貢献することを目的とする。

附則 この改正は, 平成 26 年 10 月 25 日より施行する。

(6) ワークショップ会計とゼミナール基金の統合について (杉江淑子常任理事)

従来, ワークショップ会計は独立採算制であったが, 今後はゼミナール基金と統合して, 会計報告に含めること, ワークショップ会計の通帳の残金を平成 27 年度補正予算に組み込むことが承認された。

(7) 第 46 回大会について (小川容子会長・菅裕会員)

小川会長より, 第 46 回大会は宮崎 (於 シーガイアコンベンションセンター) にて, 平成 27 年 10 月 3 日・4 日 (予定) に開催することが提案された。次年度の開催について承認され, 宮崎大学の菅裕会員より挨拶があった。

(8) 第 47 回大会候補地について（小川容子会長）
関東地区で開催される予定であることが報告され、承認された。

(9) その他
フロアから、以下の提案がされた。①共同企画とプロジェクト研究を同じ時間帯にせず、全員がプロジェクト研究等に参加できるようにしてほしい。②シニア会員（例：40 年以上会員で 70 歳以上の人）や夫婦会員割引等を検討してほしい。提案について今後、検討することです了承された。

6. 議長解任

7. 閉会の辞（伊野義博副会長）

7-4 平成 26 年度第 2・3 回編集委員会

平成 26 年度第 2 回編集委員会は、8 月 8 日（金）、立教大学にて開催された。会議での報告事項、協議事項は以下の通り。

- (1) 『音楽教育学』第 44 巻第 2 号と『音楽教育実践ジャーナル』vol. 12 no. 2 の編集作業について進捗状況の報告。
- (2) 『音楽教育実践ジャーナル』vol. 13 no. 1 特集テーマを「これまでに音楽科が果たしてきた役割、これからの音楽科が担うべき役割」に決定。
- (3) 投稿原稿の採否について：『音楽教育学』への投稿は論文 4 本、論考 2 本、研究報告 2 本で、審議の結果、論文 1 本と論考 1 本が「採択」、論文 1 本と研究報告 1 本が「再査読」、論文 2 本と論考 1 本、研究報告 1 本が「不採択」となった。また、『音楽教育実践ジャーナル』への投稿は論文 6 本、報告 1 本で、審議の結果、報告 1 本が「採択」、論文 2 本が「再査読」、論文 4 本が「不採択」となった。

第 3 回編集委員会は、10 月 24 日（金）、聖心女子大学にて開催された。会議での報告事項、主な協議事項は以下の通り。

- (1) 『音楽教育学』第 45 巻第 1 号の編集方針について協議、テーマを「音楽科へのエール」に決定した。また、『音楽教育実践ジャーナル』vol. 13 no. 2 の特集テーマを「学習者の視点から学校音楽教育を考える」に決定した。
- (2) 投稿原稿の採否について：『音楽教育学』への投稿は、論文 4 本で、審議の結果、論文 1 本が「採択」、論文 2 本が「再査読」、論文 1 本が「不採択」となった。また、『音楽教育実践ジャーナル』への投稿は、自由投稿が論文 3 本、報告 1 本、特集投稿が論文 3 本、報告 9 本で、審議の結果、自由投稿は論文 1 本が「採択」、論文 2 本が「再査読」、報告 1 本が「不採択」、特集投稿は報告 4 本が「採択」、1 本が「提案として採択」、論文 3 本と報告 4 本が「不採択」となった。

8 事務局より

事務局長 本多佐保美

1. 会員名簿作成について

2015 年 10 月発行 (12 月発送) 予定で、日本音楽教育学会会員名簿作成を計画しております。
2011 年 10 月に名簿が発行されて以来、4 年ぶりのこととなります。

会員の皆様には、別封筒にてお送りしております「名簿掲載のための会員情報確認票」の確認と返送をお願い致します。返送の締切は、平成 27 (2015) 年 1 月 31 日です。
円滑に名簿発行作業をすすめるため、ご協力のほどよろしくお願い致します。

2. バックナンバーの販売について

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。お得なセット販売も行っております。詳しくはホームページをご覧ください。

◆事務局開局時間

月・水・金 9:00~15:00

年末年始の閉局期間は下記のとおりです。

この間のご連絡はE-mailまたはFAXにてお願いいたします。

閉局期間：2014年12月27日～2015年1月12日

E-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) FAX : 042-381-3562

事務局員

窓口担当：亀山さやか・坂本友里 ホームページ担当：長山 弘



.....【編集後記】.....

心地よい秋風と色づき始めた木々の下、第 45 回大会が聖心女子大学で開催されました。ニュースレター 58 号を通して、ご参加くださった皆様にも、今回ご都合が合わなかったという皆様にも、大会当日の熱気のある、そして賑わいしつつも落ち着いた 2 日間の雰囲気がお伝えできればと願っております。今大会は、あちらこちらでたくさんの方々とお話しすることができ、いつの間にか広がっている人の輪を実感する機会ともなりました。

大会報告のほか、たくさんの方の充実した記事もいただいております。お楽しみください。

さて、今号は年内最後のニュースレターでもあります。バラエティに富んだ紙面にしてくださった沢山の執筆者の皆様、ご協力くださった皆様に感謝申し上げます。そして、新しく訪れる一年が皆様にとって素晴らしい年となりますように。(村上康子)

.....

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX : 042-381-3562 E-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・金

開局時間：9:00~15:00